

## イスラーム・ジェンダー学科研 2021 年度

イベント名：巣ごもり読書会『Understanding Muslim Chaplaincy』

日 時：2022 年 1 月 9 日（日）17:00～18:00

会 場：Zoom を利用したオンライン開催

語り手：細谷 幸子（国際医療福祉大学）、葛西 賢太（上智大学）

司 会：葛西 賢太（上智大学）

\* \* \* \* \*

**葛西：**皆様こんばんは、上智大学の葛西と申します。今日は国際医療大学の細谷先生と一緒に、『Understanding Muslim Chaplaincy』<sup>1</sup>という本を、みなで読ませていただきたいと思います。私、今日は司会兼補足説明の役割をさせていただきます。チャプレンについても、細谷先生の話の中でもある程度ご説明が入っておりますので、まず細谷先生の話をしていただいて、私から多少補足説明をさせていただきながら本書の位置づけについてお話をし、あとは皆様からご意見やお尋ねや議論をさせていただくような流れに持っていければなあと思っております。

それではここからは細谷先生にお譲りして早速お話を始めていただければと思います、お願いします。

**細谷：**はい、国際医療福祉大学成田看護学部の細谷です。今日は『Understanding Muslim Chaplaincy』という本を少しご紹介するという事で、2022 年の新年が明けて第一弾の会をセッティングさせていただきました。私の方からできれば 20 分以内におさめるかたちで、今日は「この本を読んでいなくても大丈夫ですよ」という形で呼びかけをさせていただいたので、本の内容について簡単ですがご紹介をさせていただこうと思います。そのあと葛西先生の方から少しコメント・語彙の説明などがあります。大体 20 分ぐらい時間を取って皆様にご意見を頂戴いただけたらと思っています。よろしくお願いします。

まず、ムスリム・チャプレンシーという言葉自体がまだあまり知られていないと思います。ムスリム・チャプレンというのに関心を持ったきっかけですけれども、私はこれまでイランで調査を行ってきたのですが、イランの文脈でまず一つ、イランのフィールドで終末期の患者、障害者、薬物依存者、自殺企図、それから自殺未遂の方とか、あと熱傷の患者さんの専門病院など、いろんな形でイスラーム的ケアが行われているというのを見聞きしてきました。それは病院や福祉施設だけでなく、訪問医療の場ですとかアウトリーチ、向こうから支援を求めてくるのではなくて、支援者の方から行くという形の実践もありました。最近それがスピリチュアルケアと呼ばれるようになっていて、これは一体何だろうという興味がまず一つありました。

それから私、今医科大学にいますので、日本国内のムスリム患者さんの対応をした医療機関から、あるいは支援団体の方たちから、いろいろ相談が来るようになりました。例えばハラール対応、それから「女性医師を希望しているのでどこかないですか」とか、「終末期患者さんのケアをどうしたらよいですか」とか、

---

<sup>1</sup> Sophie Gilliat-Ray, Mansur Ali and Stephen Pattison, *Understanding Muslim Chaplaincy*, Ashgate, 2013. (Routledge, 2016)

「ワクチン接種拒否する人に対してどうしたらいいでしょう」とか、「重篤な疾患を持つ患者さんと医療機関とのトラブルがあるのでどうしたらいいでしょうか」とか、「割礼ができる病院はないですか」とかそういう問い合わせが来るようになって、何かもう少し体系だった形で、情報を提供できた方がいいんじゃないかなと考えていた時に、このムスリム・チャプレンシーの本に出会いまして、こういうことができたらいのかなというようなアイデアをもらったというのがあります。

それで私と葛西先生でチャプレン研究会<sup>2</sup>というのを立ち上げていて、これからいろいろセミナーをやっていこうかなと思っています。去年ハートフォード国際宗教平和大学のビラール先生をお呼びして、アメリカのムスリムのチャプレンのお話をいただきました。それから、韓国のホスピス・緩和ケアについて嵯山女学園大学の株本千鶴先生のお話をいただき、この後はイランからお呼びする企画<sup>3</sup>と、それからアメリカの在宅医療それから日本の刑務所の教誨師という活動・調査をされていた研究者の方をお招きすることを考えています。よろしくお願いします。

では内容の方に入っていきます。

この本自体はイギリスのムスリム・チャプレンシーの現状などについて書かれています。2013年の出版ですね。イギリスでムスリム・チャプレンの活動が始まった経緯をまずお話しします。

まずチャプレンというのは組織の中で宗教的なケアあるいはスピリチュアルケアをする人という風にこの本の中では定義がありました。イギリスでは第二次世界大戦後、主に南アジアからの移民が増加して、この本が書かれた当時はイギリスの人口の約4.8%がムスリムだったとあります。今は5%くらいと紹介されていることが多いかなと思います。

イギリスではキリスト教でチャプレンという活動が長い歴史を持っていて、そこに1970年代から90年代にかけてムスリムがチャプレンの活動に参加するようになっていったということがあります。病院と刑務所が主な場所で、基本的な宗教的ニーズを満たすために地域限定的で、ある意味場当たり的に周縁的にムスリムがチャプレンの活動をするようになった、その時は「ヴィジティング・ミニスター visiting minister」とか「コミュニティ・リーダー community leader」と呼ばれていたとありました。

1990年代に入って、主に保健医療分野の機関がフルタイムあるいはハーフタイムでムスリム・チャプレンと呼ばれる人たちを雇用するようになったという経緯があります。この1990年代に起こった変化が大きな変化だったので、この要因は何かを紹介されていました。これがまず一つ目に、公的部門でより良い質のサービスへの期待が高まったということで、まず病院では、1991年にNHS（National Health Service）患者憲章というのが出ます。その中で、信仰に関わらず、すべての患者の宗教的・スピリチュアル的ニーズに応えるということが優先されるというか重視されるようになりました。これによって宗教的ケアは外部のチャプレンが提供するという位置づけから、NHSの中でそのNHSの職員が宗教に敬意を払わなければならないという位置づけに変わっていききました。また、病院の中での宗教的な配慮というのが、諸宗教の共存を尊重する「マルチフェイス・アプローチ multi-faith approach」に代わっていったということがあります。

---

<sup>2</sup> <https://chaplaincy-studies.blogspot.com/>

<sup>3</sup> 2022年1月24日、「イランのスピリチュアルケア：イスファハン緩和ケアチームにおける実践とスピリチュアルケア実践者養成について」として、ルーホッラー・ムサヴィザーデ博士の講演が行われた。

それから刑務所ですけれども、ムスリムの受刑者が増加して、その刑務所内での問題が複雑化したという背景がありました。刑務所でも同様にこの時代にマルチフェイス・アプローチというのが重視されるようになってきて、受刑者が宗教的ケアを受ける権利が重視されるようになってきました。このあたりから、ヴィジティング・ミニスターという呼び方がムスリム・チャプレンになっていったという経緯があります。

これが一つ目の要因ですけれども、二つ目に、同時にムスリム・コミュニティも 1990 年代に入って成熟してきたということがあります。まず、ムスリム・コミュニティの中で離婚や DV や薬物依存や受刑者のリハビリなどの社会問題が直接的に議論されるようになって、それにコミュニティの中で対応しようとする動きが中から生まれてきたということ。それから、こういうチャプレンの仕事に就くにふさわしい人材が出てきたということがあります。これは 1970 年代から 80 年代にデーオバンド派が設立していた宗教の学校で学んだ人たち、彼らは英語を母語とする二世代目ですけれども、そういった人たちが成長してきて英語の能力でもイスラームに関する知識においても、十分な知識を持った人たちが卒業してきたという経緯がありました。

そしてもう一つ、こういう中でレスターにある「Markfield Institute of Higher Education マークフィールド・インスティテュート・オブ・ハイアー・エデュケーション」というところでムスリム・チャプレンのサーティフィケート（資格認定証）が出されるようになります。それに先立ってチャプレンシーの活動をする人たちの団体なども、設立されるのは 2000 年代に入ってからですけれども、そういった活動も見られていました。

それから 3 つ目ですけれども、イギリスのチャプレンを取り巻く構造というのも、よりインクルーシヴでマルチフェイスになっていったということがあります。養成コースがこれまでのキリスト教をベースとしたものから色々な宗教に対応できるようなものになっていったということ、それからこれは非常に大きなところだと思うんですけれども、宗教的な多様性に対する意識向上を反映した国家予算が配分されるようになったというところもあるようです。

この『Understanding Muslim Chaplaincy』では、実際にムスリム・チャプレンに話を聞いた結果などが紹介されています。この調査対象者を選ぶときに、実際のイギリス国内の状況を反映させられるように配慮がされていたということが書いてありましたので、この調査対象者の属性を紹介することは意味があるかなと思ってここに持ってきました。

まずイギリス国内には推計で 425 人から 450 人のムスリム・チャプレンがいて、この調査では、そのうちの 65 人に話を聞いています。この 65 人のうち半数が 40 歳以下で若い世代なんですね。47%がイギリス生まれ、21%が女性。女性の割合は実際の構成割合よりもすこし多めに対象者を設定したとありました。58%がイスラーム学者でそのうち半数がイギリス国内で学んだデーオバンド派の人たち。それから、マデイナーナ大学、アズハル大学、それからインフォーマルにイスラーム学者に師事して学んだという人が残りの人たちを占めています。出身国その他ですけれども、83%が南アジア、その他にアラブ諸国、そしてアフリカ、白人のイギリスの改宗者なども含まれています。

働いている場所ですけれども、調査対象者は刑務所が 42%ですが、実際の構成割合は 5 割程度ということです。病院が 30%、高等教育機関が 18%、混合セクターが 7%、チャプレン実践者のステークホルダー、これあまりどういうことかわからなかったんですけれども、これが 3 パーセントとあります。

それから刑務所のムスリム・チャプレンの特性ですけれども、75%がイスラーム学者の資格を持ってい

て、3分の1がイギリス生まれイギリス育ちのデーオバンド派、病院のムスリム・チャプレンの3割がイギリス生まれイギリス育ちのデーオバンド派で、65%が40歳以下。高等教育機関のムスリム・チャプレンはちょっと違って、少し年齢層が高くて、73%がイギリス国外の生まれということが分かっています。刑務所はやはり対応する部分が法的なところも多いのでイスラーム学者の資格を持っている人が多かったようです。

イスラームにおける「パストラル・ケア (pastoral care)」の位置付けというところもありました。まず、スピリチュアルな危機に瀕した他者に優しくすることはダアワ（布教）の一つであり、シャハーダ（信仰告白）の行為となる。病院では患者を訪問することに意義があり、教育の場はダアワである。受刑者は「スピリチュアルが病んでいる人たち」で、パストラル・ケアは彼らに宗教的医術を提供することと位置づけられるということです。そしてそのパストラル・ケアは神の愛と慈悲から始まる。それから、パストラルというのは羊飼いですということなのですから、羊飼いが羊の面倒を見るようにしていくということなのですが、それまではキリスト教の文脈でばかり使われる英語でした。けれども、そもそもイスラームは啓典の民の伝統をひいています。預言者ムハンマドが孤児として育ち人生のある時期は羊飼いをしていたということもあるので、（もともとキリスト教的な語彙であった）パストラル・ケアをイスラーム的に位置づけるのは齟齬がない。

それからハディースでも「あらゆるものは羊飼いです」とあるとか、これは先日のビラル先生講演でも触れられていましたけれども、そういうパストラル・ケアの位置づけもあります。それからムスリムは自分自身の宗教的義務を行うのと同時に自分以外のムスリムに対しても責任を負う、それは宗教や肌の色に関わらず責任を持っているとありました。

そしてイスラームは行動を五つに分類しています。義務行為・推奨行為・任意行為・忌避行為・禁止行為ですけれども、さらにムスリムの義務には個人の義務と集団の義務というのがあって、パストラル・ケアは集団の義務に分類されています。それからパストラル・ケアというのは良い・悪いということを判断するというよりは無批判の姿勢が求められるところがあるんですけれども、これに関しても預言者ムハンマドの逸話が説明されていました。メッカで非ムスリムの女性が預言者ムハンマドにいつもごみを投げつけていた、しかし、ある日その人がごみを投げつけないことがあって、理由を聞いたら病に伏していたということで彼女にパストラル・ケアを提供しようとして、彼女の行いを許すと話したというような逸話があります。

それからコーランはヒーリング・パワーを持つ、それから預言者の医術というところでも祈りを捧げるということがヒーリング・パワーを持つということもあります。ガザリーの99の神の美名ですとか、ブルダですね、預言者ムハンマドへの賛辞ですけれども、こういったものも病人への癒しで読まれるとあります。

このパストラル・ケアを提供するムスリム・チャプレンとイスラーム学者の違いですけれども、イスラーム学者と信徒の関係性はフォーマルな上下関係で、信徒が問い合わせをした問題にファトワーを出せば終了してしまうもので、友人のような関係を築いて助けるようなものではないが、チャプレンは、むしろ関係性の構築の方に配慮して種々の相談に乗っている、というような記述がありました。

具体的にどんなことを行っているかなんですけれども、まずは病院や刑務所や教育機関などでの日常の信仰行為の支援ですね。ハラール・フードを確保したり、スカーフの着用ができるようにしたり、礼拝場所

やそれから礼拝前の清めヴォズーの場所の確保をするというようなこと。それから金曜礼拝をしたり断食明けの大祭や犠牲祭を執り行ったりというようなこともありますし、コーランや祈祷文の朗読などもおこなう。病院では出生時や死亡時の処置もあります。結婚・出産・割礼などに関連した相談や儀礼の執行ということもあります。例えばこれは53ページにあった例なのですが、ムスリム・チャプレンの職位ができる前、死んだムスリムの赤ちゃんはクリスチ안의チャプレンによって埋葬されていた。これを見て、自分はムスリム・コミュニティのために何かしなければならぬとチャプレンになることを考えたというような例が挙がっていました。

それからファトワの確認というところで、特に医療機関では臓器移植や人工呼吸器の取り外しをどうするかといった場面があって、そこでイスラーム法の法見解を参照して判断の支援をするという必要が出てくることがあります。そこでは、正しい助言でなければ患者もチャプレンも来世で罰せられるかもしれないということもあって専門的な知識が必要になる。一方で、患者や受刑者からファトワの問い合わせがあったとしても、その奥にある困りごとを理解して相談に乗るということも大きなことだとありました。逆に、施設や機関側に自分が働いている場の人たちにイスラームや自分たちの文化を説明してゆくということも大きな役割です。それから、特に刑務所と教育機関に関しては暴力的過激化を防止するという役割も担うところがあります。

ここまでで内容をざっくりとご紹介したのですが、個人的な感想と疑問として、パストラル・ケアというのは日本では伝統としてなくて、イスラームかどうかは置いておいて、医療機関で、例えば終末期ケアの患者さんにスピリチュアルケアを提供したいと言っても、そういう場合ほとんどボランティアの傾聴者が来てくださるようなことしかできていないです。

例えば外国人でムスリムの方がいらしたりしても、医療通訳さえ病院や自治体が準備できないということがすごく多くて、こういう環境で例えば病院の中で色々ニーズがある場合にも、果たしてムスリム・チャプレンみたいな活動というのが日本で可能になるのだろうかというところが疑問としてあったのですが、無理かもしれないという感じがしています。もしムスリムの患者さんの信仰の権利を守るとしたら、別の既存のシステムに乗せるか、別の形でネットワークを作るということも考えないといけないのかなということも、私は医療従事者でもあるので、そんなことを考えながら読みました。これは、日本人のあるクリニックの医師の話なんですけれども、その医師は知り合いにイスラーム教徒の人がいて、その人から命にかかわる場合はイスラームのことは気にしないでいいと聞いている、でもすごく厳格なイスラーム教徒の場合は指導者に聞かないといけないらしいので日本では無理、できる範囲では対応するけれども、というお話をしていました。

できる範囲ということは、できる範囲を超えたら診ないということなので、確かに医療機関がイスラーム学者に問い合わせるのは無理ですけれども、受診拒否にならないように何かできることがあるだろうかというようなことも考えていました。イランの事例で考えることもたくさんあるのですがそれは次回の研究会の時にご紹介させていただこうかなと思っています。以上です。ありがとうございます。

**葛西：**ありがとうございます。それでは私から引き続きお話をいたします。

私が所属しているところはグリーンケア研究所というところでありまして、日本版のチャプレンを育てようと思っているところです。私と一緒に上智大学から何人かグリーンケア研究所関係の者が来ておりますので、その人たちがイスラームの話を少し理解を深めていただきたいと思います。私の資料の一番最

後に囲み記事として、少しイスラームについての紹介を載せました。これは、専門家の皆様がいらっしゃるところで大変恥ずかしいんですけども、間違っているところがあると思いますので、こっそり後で教えていただければと思います。でもこれがあるとないとで、ディスカッションを聞いても、わかる、わからないがだいぶ違うと思いますので、今日出そうな用語を並べてみました。逆にイスラーム研究の方はチャプレンって初めて聞く言葉だと思いますので、それについての紹介を改めてこちらに囲み記事として載せましたけれども、今日はこの内容につきまして私の口頭の説明はさせていただかないつもりです。質問をいただいたらお答えできるかなと思います。

まずこの本なんですけれども、イギリスの南半分、イングランドとウェールズでの、ムスリム・チャプレンについての初めての詳細な研究ということで、実はこれに先立つ研究があります。イギリスの刑務所内でのイスラームの宗教実践の不自由を取り上げた共同研究がありまして、今回の著者のギリアット＝レイ先生、たぶんこの名前のつけ方からしてスイス系の人じゃないかなと思うんですけども、ゾフィー・ギリアットという形でその当時は載っていましたので、レイさんと結婚されてこういう名前になったのかと思いますけれども、ジェームズ・ベックフォードというイギリスの宗教社会学の大御所と一緒に共同研究を二十年前にされました。それがこの Beckford and Gilliat, *Religion in Prison: Equal Rites in a Multi-Faith Society*, Cambridge UP, 1998 という本です。それが一つの刺激になって、ギリアット・レイ先生は今回の共同研究をムスリムの研究者、たぶんムスリム・チャプレンの当事者と一緒に進めていくということになったのだと思います。

このタイトル、なかなかしやれが効いていまして、イコール・ライツ (Equal Rites) が、平等な権利のライツ (rights) ではなくて儀礼 (rites)、「儀礼の平等」ということになっていまして、刑務所内で例えば金曜礼拝をふつうに実現させるとか、刑務所内でハラール・フードをちゃんと食べられるようにするとかそういう意味合いをここにひっかけているんだと思います。ムスリム・チャプレンの仕事をしている領域というのは非常に幅広い領域で、今回この話をイスラーム・ジェンダー科研の巣ごもり研究会の中でさせていただけるのはとてもありがたいことだなと思うんですけども、それはジェンダーの問題を取り扱うときに起こることと重なることを今回扱いうるということが私の実感としてあります。

例えばキリスト教風の慣習が当然にある社会でのイスラームの慣習をどういう風にするか、家庭内でどういう風に子供を育て、学校教育とどのように両立をさせるか、母国語の世代と英語しかしゃべれない世代、それから家族内での宗教の不一致というのは、この本文の中でも 181 ページに例が一つありますけれどもたびたび語られています。

ですから離婚などもあるし、葬儀の時はどういう方式で葬儀をするかなどが結構問題になったりします。個人と社会の間の葛藤、伝統と近代の間の葛藤、それからジェンダーとセクシュアリティの葛藤。欧米社会に暮らすムスリムや女性のムスリマが経験する様々な葛藤を改めて位置づけなおす仕事としてチャプレンは考えることができるんじゃないか。ムスリムであるということは、もはや個人の信仰、私事ではなく、イギリスの社会の中で公的に位置づけされる時代になっておりますので、ムスリムとして生きていくためには、それを自分の中でもう一度位置づけなおす戦略が必ず必要になりますね。

ムスリムとして生き、同時にイギリスの一市民として生きるにはどうしたらいいかということを一人ひとりが考えないといけない。アイデンティティの問題があるわけですけども、そういう相談事はおそらく一人一人違います。そういう相談に乗るというミクロな動きと、同時にそれが集合的になると、現代のイ

スラームを大きく変えてゆくマクロの動きにもなっていくんだなという、そんな見通しをこの本は述べています。

今日もお見えになるかなと思うのですが、東洋大の B 先生が、サード・スペースというものの研究をなさっていますけれども、そういうムーヴメントともかかわりがあるかなあと思います。チャプレンという仕事は、組織の中での相談者で、宗教についてもある程度専門的な知識を期待されるんだけど、その一方で柔軟なことを期待されているというところがあります。

よく誤解されるんですが、聖書やコーランや聖人の言葉を引用して説得布教する人がチャプレンという風に、研究者でも研究者以外でも、多くの人が思っているんじゃないんですけど、そうではなくてむしろベックフォードの研究に見たように、いろんな場所で、宗教活動ができる自由を支える仕事をします。日本でいう信教の自由という信仰しない自由のことを指すことが多いですけど、むしろ欧米のチャプレンの文脈では宗教実践の機会をどんな場所でも提供するという、そういう宗教実践の権利を保証する役割としてチャプレンが存在しています。典型的なのが金曜礼拝で。

当然チャプレンは複数のいろんな宗教的な背景を持っているんですけど、イギリスではアングリカン、英国教会に属している人がそれまでは主だったわけですけど、基本的にチャプレンというのは宗教の違いを超えて奉仕するのが当然で、仏教徒のチャプレンがクリスチャンのためにお祈りをするとか、ムスリムのチャプレンがクリスチャンのためにお祈りをすることとも当然なんだと言われています。ムスリムというのは言うまでもなく、社会の中で誤解されがち、様々な批判や迫害を受けがちで、特に 9.11 の後のアメリカなどはムスリム／ムスリマを守るためにいろんなことをしなければいけなかった。クリスチャンのチャプレンならやらないこととして、ムスリムのチャプレンの場合は、ムスリムの権利擁護（アドボカシー）に配慮をする、あるいは、理解を深めるための前線に立つという役割もあります。

ちょっと面白いエピソードが本文の中にあっただけでご紹介しておきますと、ムスリムではない人から、女性のチャプレンが「スカーフを何でかぶるの」と揶揄されたときに、こんな風なやり返しをしたという話があります。「スカーフを何でかぶるの?」「ヘアスタイルが決まらなかったからよ、でも詳しく聞きたかったらランチの時に時間があるから教えてあげるね」というようなことが 88 ページに載っていたりします。

彼らはムスリム・ムスリマのチャプレンがいることによって、病院はメリットがあるということを示すために、様々なサポートを、患者さんや家族にだけでなく、同時に医療スタッフのためにも様々なサポートをします。例えば、イスラームの中では、病人のお見舞いは大変徳を積む行いという風に考えられていますから、お見舞いの人とか、あるいは誰かが亡くなるとたくさんの人がお弔いに殺到したりするわけですね。病院にたくさんの人が殺到して病棟の医療スタッフが困っているときに、「遺体がいなくなればもうみんななくなるから大丈夫だ」というようなアドバイスをスタッフにしたり、また集まっている人に「病院に迷惑をかけることは、かえって天国にマイナスのポイントを残すことだ」というようなことをお話しして、その人たちを落ち着かせたりするというようなことがあります。

あるいは死産になった子供の体を、イスラーム法的には洗う必要はないんだけど、と、そのように法学者がアドバイスをしたときに、お母さんとしては、生まれたばかりの我が子、たとえ死産であってもその子の体を洗いたいという願いがあって、洗っちゃダメなのかという風に問う。それに対してチャプレンがイスラーム法学の理解の上で、「赤ちゃんはこの世にまだ生まれてきてこの世の穢れを受けていないので赤ちゃんは清らかなんだ、だから洗う必要がないんだ」という風に助言をして、お母さんの動揺した気持ちを

鎮めるというようなことがあったりいたします。

ここで見るように、伝統的なイスラーム法学者ウラマーとチャプレンという二つというのがたびたび本文の中では対比されています。イスラームの専門家ではない人もいらっしゃいますので改めて確認をいたしますけれども、伝統的なウラマーはクルアーンとかハディースとかスンナといったイスラームの知識を記憶し伝承する。そのうえで悩みごとにファトワーという形で助言をするのがこのイスラーム法学者ウラマーであります。彼らはそれに力を注ぐゆえに、むしろムスリム・コミュニティの中での新たな多様な葛藤には伝統的なウラマーは答えられない、あるいはそれに気づくことができない悩みがある。

それに対してニッチな葛藤の現場で自在に問題を聞いてそれに対する対応を考えるムスリム・チャプレンというのが台頭する理由がある。ただ、そういう人たちの中で、最初のころはボランティアで活動しているムスリム・チャプレンの中で、全くイスラーム法学的な知識を持たないまま、立ち往生してしまう方もおられたということなので、せめてクルアーンはちゃんとアラビア語で読めるようなそういう人たちになってほしいよね、そしてもう少しウラマー的な専門知も身に付けてほしいよねと言う形で、イギリスでもマークフィールド研究所というところが出てきたり、あるいは米国コネティカット州にハートフォード神学校<sup>4</sup>というのがでてきたり、そこがイスラームのチャプレンを養成する機関として成り立っていたりするということがあったりいたします。

それで、デーオバンド派が結構マジョリティになっているということ、細谷先生がご紹介をしてくださいました。おそらくこういうチャプレンのような仕事を最初に開拓するのは、口コミとか人間の個人的なつながりのネットワークなのだなという風に思います。日本でも刑務所で傾聴をする教誨師と呼ばれているチャプレンがいますけれども、この大半は浄土真宗本願寺派という日本で一番大きい宗教団体のメンバーだったりいたします。

学校や制度の変化についてはすでに細谷先生がお話をしてくださいました。まだこの分野は萌芽的な分野なので、参考になる書籍とか、チャプレンたちが後々のために残してゆく学びのための資料が圧倒的に不足していて、チャプレンは非常に多忙でもあるので、その人たちと一緒にシャドウイングをして、つまり後ろにくっついて歩いて、とにかく全く資料が限られている分野で研究しなければならなかったということが書かれております。今回のお話はイギリスのお話なので、実はイギリスの福祉制度の話を知っていると大変よくわかるなということ、今年出た金沢周作著『チャリティの帝国』という岩波新書の本があるんですけれども、これを見ると非常によくこの制度を育てていったイギリスの背景というものについて、考えることができましたけれども、これは話が広がっちゃうのでちょっと置いておきたいと思います。

イスラームというのは男女をしっかり仕切る社会でありますけれども、チャプレンのトレーニングの中では、輪になってグループでの学びというのをいたします。男女がカーテンで仕切らないで一緒にトレーニングをする、実際にトレーニングの場に行って、例えばウラマーで、すでにウラマーとしてのトレーニングを受けて、ウラマーとしての資格を持っている男性が、女性と同じ部屋で女性と一緒に輪になってやらなければいけないということで、大変最初は戸惑いを覚えるということが 65 ページから 66 ページにかかれております。

それで「これって一緒にやらなきゃいけないんですか」って聞くと、「ええカーテンでも仕切りませんよ」ということをスーパーバイザーが言うわけです。戸惑いながら一緒にやるんだけど、一緒にやってい

---

<sup>4</sup> 2021 年に改称し、ハートフォード国際宗教平和大学となった。



るうちに信頼感ができてきて、やがてどういう風に異性と関わったらいいかということが分かってきて同僚として助け合うというようなこともできるようになっていくというような経験を語っていたことが大変興味深く思いました。

細谷先生が語っていらっしゃっていたことに若干コメントをさせていただきたいのですがチャプレンを雇うのはどういう仕組みなのかということについて、日本ではどうなっているかということをやっと補足させていただきたいと思うんですけれども、日本でチャプレンを雇用しているのはほぼミッション系の病院です。キリスト教の病院ですね。ただ、そうじゃないところもあって、日本の保険制度では、チャプレンのような人を雇う予算がつけられませんので、例えば聖路加国際病院というところがありますが聖路加などでは聖路加国際大学の教員としてチャプレンを雇用していたりします。あるいは医療法人の職員として雇用していたりします。ですので、イスラームのチャプレンを雇用するようなことができた場合に、やはり同じような方法をとっていくのではないかなということをわたくしは考えております。

こんな感じで細谷先生とはちょっと違う角度からこの本について、お話をさせていただきました。この本は、チャプレンという制度の他に、イスラームがどうやって弱い人を助けるか、それが実際にイギリスでは実際にどのように表れているかということについて非常に広い見地から語られておりますので、私と細谷先生だけではなく今日いらっしゃる様々な専門家の方々にも、ちょっとコメントをいただけたらありがたいなと思います。

例えばイギリスの事情に詳しい先生がおられたり、日本国内のムスリムはどのように助け合っているのかなあとか、さっきもちょっと申し上げたのですけれどもサード・スペースの話をやび B 先生にはしていただきたいなと思ったり、というような感じでちょっと何人か私思っている方がいるんですけれども、まずはちょっと私が最初に口切をしますという方いらっしゃいますでしょうか。質問でもご意見でもコメントでも結構でございます。

よろしければお顔とマイクをオンにさせていただいて。では恐れ入ります、A さんはイギリスの専門家であいらっしゃったと思うのですが、いきなり予告なくご指名をしまして恐縮なのですが、今日聞かれた中で「もしここは」というようなご事情や背景などコメントなどいただけたら大変ありがたいのですが、いかがでございましょう。

**A 氏：**イギリスの調査はやりましたけれども元々は私はイギリスのことはやっていなかったもので、あまり言うことはないです、初めて聞くことばかりで非常にありがたかったです。以上です。

**葛西：**ありがとうございます。すみません事前相談もなく。でも色々な形で情報交換をさせていただければと思います。

では、新しいイスラームの中の相互扶助の動きということで、例えば B さん、サード・スペースの話をもしよかったら。これはアメリカの事例ではありますけれども、ちょっとうかがえたら。

**B 氏：**こんばんは。今回はビラール先生の講演会もすごく楽しんで伺って今日もすごく色々勉強になって、まさに私の問題関心にもかかわっているところで、ちょっとただやっぱそのサード・スペースについては本当に研究がなくて、まさに手探りの状態で、勉強しているところなんです。アメリカにおいてもサード・スペースを対象にした研究所というのはほとんどなくて、いくつかあるんですけれどもなかなかそ

それをどうとらえていいのかというのを模索していて、その模索の中にムスリム・チャプレンの話というのはよく出てくるんですね。

それでこの前のビラル先生講演に参加させていただいて「やっぱりああそうか、サード・スペースとつながっているのか」という風に納得したうえで、今ちょっと模索しているところなので、あまりこうだという風にまだ全然、まさに一緒に勉強させていただければという気持ちでと思っているのですが、今の話でやっぱり思ったのが、細谷先生と葛西先生が両方言及していたんですけれども、わたくしちょっとすみません、「是非読まなきゃ」と思っているんですがちょっとまだ中身を読んでいないんですけれども、コミュニティが成熟していったその中で出てきた動きという風にありました。これはやっぱり実際そうかなと思ってまして、つまりムスリム・コミュニティが成熟する中で DV とかその他の問題がいっぱい出てくるんですね。

これをどう対処していくのかというのが一つ大きな課題で、それに対して所謂ウラマーやイマームですねモスクのイマームの人たちがそれに対処できていないということに対する反発感・批判からサード・スペースというのは出てきているというのはよく言われていると思うんですね。つまりオーソリティ、宗教的な学者の立場からすると、つまりそれを教義として解釈して、「いけないことなんだ」とそういう風に言って終わってしまう部分がある。

例えば、アルコール依存とかの人がいたりするわけですよね、ムスリムの中でも。そういう人がモスクに行ったら「どうしたらいいでしょう」と言ってもそれはたぶん「だめだ」と言っておわりになってしまふ。例えばあるいは不倫をしているとか。そういうものはもう全部基本的にはムスリム・コミュニティではあってはいけないことで、そしてそこにたぶん LGBT という問題も入ってくるんですけれども。ただそういうものがあるのでそれをどう対処してゆくのかというときの動きという風に見ていてですね。ムスリム・チャプレンというのはそれに答えるという形で求められているのかなと思うんですね。

その時にやっぱり数少ないサード・スペースの研究なんかを見ると、サード・スペースの理念というのはイスラーム教義的に正しいかどうかということよりは、その人たちが抱えている問題をどうイスラームという枠の中で説明・解決・対処してゆくのかという、人々の経験ですよね、毎日生きてゆく、そういうものにどう対処していくのかということがとにかくメインで、暗にサード・スペースみたいなものを見ると、それをさらに一歩進めていて、そういうイスラームみたいなものですね。人々の経験に裏付けされた形で実は新たな宗教解釈みたいなものは実はそこに出てきていると。だから私に関心があるのはそっちの方です。

そこから、つまりイスラームの解釈というどうしてもコーランを読んでどう解釈するかとかそういう話なんですけれどもそうではなくて実はそこに経験をどう人々の生きている経験に基づいてどうそれをやっていくかということがあって。ジェンダー科研との関連で言うと実はアメリカで展開する所謂イスラミック・フェミニズムというのはフェミニズムの流れも実はそっちの流れの方でやっているんで、そこに親和性もあるというかそういう全体として最近動きがあるんですね。

いずれにせよそこらへんで親和性があって全体のそういう動きがアメリカであるのかなといううえで、ちょっと私が思うのは、そういう動きなので結局正しいイスラームというものが決まっていけないという、極論を言うと正しいイスラームというのは先にあってそれに基づいて正しい動きをすとかそういう動きではなくて、人々の持つ経験から戻って行くみたいなパターンというか動きがあるので、そうすると難しいのはやっぱりそうはいってもただムスリムとしてこうしなければいけないというオーソリティの問題が出てくると思うんですけれども。

ただやっぱりサード・スペースに参加するような人たちというのは基本的にそういう既存のオーソリティに対して不満を持っているわけですね。それがおかしいと思っている。それでやっぱりやっている部分があるので、だからあまりウラマーの言っている、例えば伝統的イスラーム法学みたいなのではこういうみたいな議論を先に出してきて、こうしましょうというのだと納得いかないわけですね。チャブレンも今の話からするとやっぱりそういう側面というのがあるんですけれども、一方でやっぱりオーソリティ的なものを勉強してそれを身につけた人がやるという、どうしても構図になってしまうというところがあるので、そこをどうやっていくのかなというのはありますね。

だからチャブレンはイマームと違って現場において先ほどの新生児の死体は洗わなくていいとか、そういう話のときに寄り添う形で説明できるというのはたぶん一つの方法だと思うんですけれども。ただ一方でそこでの法的見解は多様な見解がありうると。先ほど両先生が話していた、デーオバンド派がやっぱりメインだという話ですけれども、やっぱりデーオバンド派は一つの立場で、その解釈に納得しない人たちが結構いると思うんですよね。他のものでもそうで、今私がアメリカなんかで見えても感じるのは、ビラール先生なんかもそうなんですけれども、いわゆる伝統スンナ派の立場の影響力は私からすると結構強いように見えるんですね。

その背景には、いわゆるイスラーム主義のサラフィー系の、原理主義系のものがそれまで席卷していたことに対する反発みたいなものがあるんですけれども、それにしてもやっぱり権威みたいな形で権威付けみたいなものが必要になってくるし、でもそうするとその権威には、納得しない人たち、権威が必ずしも確立していない空間の中でチャブレンはどのようにして権威を維持しつつも寄り添ってゆくというか、というちょっとそういうところで難しいかじ取りはあると思うんですね。

中には例えばものすごくイスラームの超リベラルな考えを持っている人たちがいるとしてその人たちにイスラーム法学がこうだとか言ったとしてもそれは納得しない可能性がありますね。そういう人にどう寄り添ってゆくのかな、その辺の葛藤みたいなものは今はまだチャブレンの制度が確立していない状態なのであまり表に出てこないように見えるんですけれども、そのうち出てくるのかなというのがちょっと私の感想です。

これは私思うんですけれども、たぶん他の宗教ではすでにたくさんあるように思うので、ではむしろ葛西先生なんかですねキリスト教とか仏教とか他のチャブレンシーなんかでやっぱりそういう問題、例えば浄土真宗がメインだとしたら他の宗派の人はやっぱりそういうチャブレンが来たら「え」という風になってしまうのはあるのかなとか、ちょっとすでに洗練された部分は他の宗教ではあるかなと思うので、そこらへんで宗教権威の問題と実際の人々の間をつなぐというのはたぶんイスラームに全然限らないのでどうそれが現場で行われているのかなというのが関心として一応質問としてさせていただきます。いずれにせよありがとうございます、すごく勉強になっています。

**葛西：**ありがとうございます。とても情報量が多かったので、逆にお答えしにくいんですが、今最後におっしゃってくださった、権威の源泉をどのように考えていくかということは男性のチャブレンの場合と女性のチャブレンの場合でのおそらく違いもあり、他の宗教との違いの話も含めて少し自分も整理してお話を後でさせていただければと思います<sup>5</sup>。ありがとうございます、むしろ問いをいただいた気がします。一つ

---

<sup>5</sup> 読書会後に B 先生の質問を振り返ってみた。「臨床宗教師」という日本版チャブレンを養成する機関と

だけ、サード・スペースというのはネットワークですか場所ですか、それとも組織というか、オンライン・コミュニティのようなものでしょうか。

**B氏：**そうですね、一応場所なんですけれども、必ずしも空間的な場所を想定しない場合もあるので、ネットワークも含めて、モスク以外のなにかムスリムが集まれる場所というのが一番基本的なものになっていると思います。ただそれはオンライン上の空間である可能性もあるし、特定の場所を持たない組織を持たないような形で展開するような場合もあって、例えばイベントやるときにだけ集まるとかそういうこともあるのでそういうものの全体を含めてサード・スペースというような動きというのがある感じだと思いますね。とにかくムスリムが礼拝のために集まるモスクという制約を超えた形で集まって何かできる場所という感じですかね。ちょっとこの定義もちょっと私も今模索中ですが大体見た感じはそんな感じです。

**葛西：**ありがとうございます。いろんな意味で本当にフロンティアですね。細谷先生どうでしょうか。ちょっと皆さんの顔ぶれを見ながら、Cさんにもちょっとコメントをいただけたらありがたいんですけれども。いかがでしょうか今日の話聞いて。

**C氏：**今日はいい機会をいただきありがとうございます。今日だけじゃなくて11月の末にもビラール先生の時にも、あの時はほんの一部しか見れなかったんですけれども、拝見して非常に勉強になったと、ありがたく思っています。ご指名ですので、色々刺激を受けたということの反映として、三つ四つ申し上げることができればと思います。おそらくご期待かどうか知りませんが、最初に手短な話ということで、日本ではこういう風だということを多少申し上げればと思います。

先ほどのお話のチャプレンの仕事は、同種の課題は日本でも当然規模は小さいですけれども起こっておりまして今後も起こるだろうと我々は当然予測します。現在までのところは、私が属している日本ムスリム協会というところがありますし、あるいは私独自のサークルも持っていますので、そういうレベルというか、チャンネルで、色々な相談事、女性関係であれば私のところに来る人はあまりいないんですけれども、日本ムスリム協会の婦人部とかそういうところで相談を受け付けている、あるいは勉強会を開いている、場合によっては料理教室もですけれども、それは非常に大いに満員らしいんですけれども、同種の問題は起こっていると同時に、それに対する対処方法の大半は今のようなもので行われている。

他方しきりに出てきました刑務所について、急に具体的な話を申しますと、現在のところ私の聞き及んでいる範囲で、かなり前に東京近辺の刑務所内にシーア派の方がおられて、その方は特にシーア派のイマーム・指導者に話をお伺いしたい、そういう要望があってそれが出されてその方と直接話をしたんですけ

---

して東北大学があるが、ここでは、布教伝道や教義の強要を控えるチャプレンの理念の意義を、熱心な宗教者に教えるということに努力を払っている。また、サード・スペースの話は、日本の禅が米国経由でマインドフルネス瞑想として再輸入され多くの人に受け入れられるという現象を想起させる。ちんぷんかんぷんなことを「禅問答」というが、日本において禅は高尚（そうに見えてなかなか正しく理解されない）なものであった。マインドフルネス瞑想は寺院のみならず病院でも学校でも企業でも「宗教ではなくマインドフルネス」と教えられている。内容が変わるのではなく、解釈のしかたが変わる、あるいは説かれる文脈が変わると新しい力を持つ、そんな一例と思われる。

れども、一二度か何回かいかれましたが、それはもうそれで終わりました。教誨師、日本の場合は宗教を問わず要望が出てきた宗教の指導者が出向くということになっている<sup>6</sup>。それももう常に恒常的に要望が出てくれば、制度化されているということかもしれませんが、原則は要望があつてですから日本の刑務所の中からイスラームの話を聞きたいということは、私の聞き及んでいる範囲ですけれども、かつそんなことがあれば当然耳に入ってくると思いますが、まずありません。そう言いつつ私個人が頼まれて先般行きました。それは幸か不幸か、私の書いた本を一冊読まれて入信しましたということで、呼ばれて行きましてお会いしました。

ただそれはそういう意味でケアということは間違いはないんですけれども、何か悩み事があつてと言うよりは大変な勉強家でものすごい読書欲を持っている方だったので、こっちからそういうのを差し入れるということで終わりました。ですからいわゆる教誨師の中身的にはそういうことなんです、教誨師の場合はもっときちとした、例えば複数のニーズがあれば、教室のようなところでお話をすると言っていますが、私の場合は個人的に面会時間を定められて、一人当たり 30 分しか会えないとそういうことがありました。ですがそういうことは例外中の例外ですね。あまりこれをもって日本ではなんてことは全くないということです。他方病院関係・医療関係、これはあるだろうと思います。思いますというのは変ですけども、いっぱい具体的な問題が生じているようなので、ただ、どうしても婦人関係になると思いますから、私個人は直接の経験はないし、ただ先ほどお見舞いは抑制すべきだということになっているということとはちょっとございましたけれども、日本人のせいか、あまりお見舞いは良いんだというのがありますけれども、お見舞いに行ったりというのはありますけれども、それを超えた悩み事を聞いたりだとか、チャプレンシーとしての仕事を定期的とか組織的とかそういうことは全くないですけど、ただわりに気軽にそういうことに応じられるような雰囲気というか流れにはなっております。

以上のようなことが手短に現状またほかの機会があれば私も意識して集めることもできるかと思います。次は難しいかじ取りだとさきほど B 先生の方からのご指摘で、つまりこういうその場その場あるいは日々の悩みにお答えするケアの仕事ですね。それとそれの背景にありうべきイスラーム法学者との関係というか、これは底流として当然あるし、そのためのイギリスなどでの証明書が出されるようになったという話だったと思うのでその話を後でお伺いしたいと思っているんですけれども、ただイギリスあるいはアメリカでももっと日本より分量的にも問題の鋭さももっといわば先進的というか進んでいるんだと思いますが、今日お話を伺ったりしてあるいはビラル先生の話もそうだったと思うんですけれども、大半の問題は私の知っている限り、ネット検索でファトワーで教えてもらえるようになっているんですね。

少なくともサウジを中心とした、あるいは湾岸を中心とした、そしてエジプトのアズハルにおいてもそうですけれども、ネット検索でほとんど 100% 答えがもらえます。例えば、命の関係でもいっぱいありますね、安楽死の問題、人工中絶、遺伝子操作、脳死の問題、臓器移植、あるいは不妊治療どうだとかですね、さっきの死生児の埋葬の仕方、これも何日以降の死生児であればきちっと埋葬すべし、何日以前であれば、子供ともみなさない、その中間はどうだとかですね、事細かに指示というか、ファトワー・法勧告がございしますので、それにどう従うべきかどうか、異なる意見がある場合には困っちゃうんですが、相当ファトワー

---

<sup>6</sup> 全国教誨師連盟のウェブサイトによれば、1820 人の教誨師の大半は、仏教、キリスト教、神道、諸教の所属である。その他 1 名、とあるのがここで C 先生が言及されている事例であろうか。

[http://kyoukaishi.server-shared.com/99\\_blank024.html](http://kyoukaishi.server-shared.com/99_blank024.html)、2022 年 2 月 7 日参照。

の機能は、十分サービスを提供していると思っています。

ですので、さらにそれを超えて、チャプレンという形で対面方式というかそれはまた相当進んでいる話だなど。その上で戻りますけれども、チャプレンシーの証明書が発給されるようになったとおっしゃったので、その証明書発給のシステムというか資格とかどういう大学で例えば単位を取るとかかと思うんですけれども、もし情報をお持ちでしたら是非教えていただきたいなと思って、具体的な質問です。

最後の分野はですね、イスラムチックで言いたくもないんですけれども、いい機会だから。コーランと書いておられたの、最近で日本語の表記はすべてクルアーンになっていると思います。これはシーア派の出している日本語のコーランも、聖クルアーンになっていまして、それは両発表者の方、コーラン、クーラン、クルアーン、併用されている場合もあったかと思いますが、クルアーンが日本で今通用している書き方ですと、コーランで通じるから良いっちゃ良いんだけど、古い日本語の表記であるということを感じました。

それからビラル先生はクルアーン第二章 123 で他者へのケアのことを述べられたけど、それは 124 ではないかというご指摘で、今少し長い説だったの、あるいは私誤って読んだかもしれないですが、123 であれ 124 であれ広く言えば他者へのケアということでは、両方当たっていると思いました。

またこれはイランの例でしょうけど、クルアーン、ハディース、およびガザーリーの 99 の美称と書かれておりまして、ガザーリーの 99 の美称というのは、もちろんガザーリーというのはもちろん、有名なムハンマド・ガザーリーだと思えますけれども、どうしてガザーリーの 99 の美称が特記されねばならないのかという風には個人的な関心、つまり非常に他に多くの中世のイスラーム学者、99 の美称というのは非常に大きな問題ということもあって、多くの方が論じてまとめて来ておられる。

一番大きくまとめたのは、イブン・カウムン・ジャウズィーヤがきっちりした形でまとめたものを書いていると思いますが、いずれにしてもどうしてガザーリーの 99 の美称だけが特記されることになったのかなということも個人的には、疑問というか質問というか知りたいなと思った点です。

**葛西：**とても、実際にムスリムの中のことをご存じの先生に現場からの「こういう感じですよ」というご報告と、ファトワの話と、それからクルアーン、私今の日本人の中では、イスラームに関心を持たない方は、コーランで覚えている方が多いので、「クルアーン（コーラン）」という風に私は資料に書かせていただきました。

先生が、証明書が出る基準ということをおっしゃっていらしたんですけれども、今チャプレンのトレーニングは、1600 時間のトレーニングというのを一つの国際的な基準にしていると思います。この 1600 時間というのは病院に行ったり、刑務所に行ったり、現場で困っている方の声を聞く時間と、それから同時にそれをグループに振り返りする時間を合計で 1600 時間ということで、私たちのところでも 1600 時間を目指して厳しいトレーニングをしている方がたくさんいらっしゃいます。

この 1600 時間というのはものすごくハードで、それこそ大学院に行くぐらい時間がかかってしまうんです。さっきの B さんのおたずねにも関わりますし、他にも個人的に質問いただいていることにつながりますね。基本的にイスラームもキリスト教も、人間というものは善い行いをしなければならないという戒律というか、前提に立っているけれども、実際には人間が弱くてその通りに行うことができなかったり、あるいは様々な事情でその通りに行うことができないというそういう実情に対してどうかかわっていくかということについては、聖職者がなかなか答えを持っていないということが多いと思います。

私アルコール依存症の自助会の研究というので宗教学の学位をいただいたんですけども、そのグループは最終的にキリスト教の中の悩みを告白する場というの、宗教の中に取り込みつつだけけれども、アルコール依存という罪深いことをやっていることに対する宗教の批判は一回棚上げして、本人の弱さというのをちゃんと語り合う場を作ることによって、お互いに寄り添いあえる場所を作るといような方法でアルコール依存から回復していくんですが、これは現在医学の世界でも標準的な治療法と言われております。ちょっと話を戻しますと、ですのである意味その宗教的な権威というものを上手に使い分けるといのか、行使する時と、それからそれを一度棚上げして同じ目の高さから限界ある人間として悩みを聞くとときと両方をチャプレン流行るトレーニングをその 1600 時間をかけて行っているという、そんな風に説明ができるかなと思います。

**C 氏：**わかりました。それでは、ウラマーよりもレベルが高いかもわからないですね。

**葛西：**おそらく両者が歩み寄っていきながら模索してゆくような動きがこの先の中ではあるんじゃないかなということを、この本は予想しているような感じがいたします。

**C 氏：**ありがとうございました。

**葛西：**些細な話で申し訳ありません。他にはいかがでしょうか。

チャットにもコメントが来ているようですので、読ませていただきますね。

「日本人ムスリマですが、ムスリム・チャプレンに何を求めるかという基本的な問いを感じます。心の悩みを抱えている方たちにとって、知識豊富な法学者に相談しても解決にならないことがあります。ただ聞いてほしい、共感してほしいという思いで悩みを語ってもイスラーム的にこうしなければならないこうしてはいけないと助言されても何の解決にもならないです」。……切実に思いを訴えてくださりながら、ここに課題があるよとご指摘をしてくださっていると思いますけれども、D さんよろしければ、ご自身の言葉で補足を。

**D 氏：**すみません私別に何の先生でも何でもなし、ただのムスリマなんですけれども、私も 20 年前くらいから外国人と結婚した日本人の女性、ムスリマの人たちの悩みとかも、色々聞いてきたりとかしてきたんですけれども、色々な話を聞いていると、結局悩みをもっているムスリムは逆にモスクとかで相談しにくいという部分があるみたいなんです。私も色々聞いていますと、やっぱりちょっと知識のあるムスリマの人、外国で勉強したムスリマに相談すると、礼拝すれば悩みは解決されるとか、クルアーンを聞けばいいとか、これをやっていないからこうなっているんだとかこれをしなさいとかこうすればいいというアドバイスをくれるんですけれども、別にイスラーム的なアドバイスを求めて相談しているわけではなくて、色々な家庭内での旦那さんに対する不満だったり悩みだったり、「旦那さんが『これがイスラームだ』『こういうことだ』』ということを書いてきているけれども、それは本当なのか」とか、家庭内におけるいろんな悩みとかそういう不満みたいなものを訴えている。

多分私なんか一緒に聞いていると、この人は聞いてほしいんだな、共感してほしいんだなって感じるんですね。でもやっぱりイスラームを勉強してきた先生なんかはイスラーム的にそれが正しいか正しくない

かみたいなおっしやるので、そうすると、その人としては納得いかないみたいな、自分のことが分かってもらえなかった、そういう気持ちが残るみたいで、結局やっぱりモスクから遠ざかっていったり、やっぱりモスクで相談がしにくい、あるいはモスクの中ってすごく狭い、イスラーム社会ってすごく狭いので、もうこの人は誰の旦那さん、旦那さんはこの人で、と狭い世界なのですぐばれちゃうんですね。

そうすると色々噂になったりとかもするのでそういうのもあって、あまりモスクとかでは相談しにくいというのが女性の場合あったりということもあると思うんです。だから個人的なつながりの中でそういう相談とかっていうのはあったりはすると思うんですけども、ムスリム・チャブレンというのは単にイスラーム的な知識を持っている人というのはあまり、そんなのは先ほど C 先生がおっしゃっていたように、ネットとかで検索すればたくさん解決できる、色々答え・回答を得ることができるので、いくらでも勉強だったり回答・ファトワーは求めることはできるんですけども、それよりもどっちかっていうと、やっぱり悩みとか心にあること、自分の弱さであったりとか犯罪を犯す人なんかは戒律を守ってなかったりとかそういうところがあると思うんですけど、そういう弱さであったりとかそういったところに寄り添ってくれるそういう存在を私としてはムスリム・チャブレンに求めたいというところがあります。

**葛西：**ありがとうございます。E さんもうお願いできますでしょうか。

**E 氏：**すみません、あの今 D さんの話を聞きながら、色々わたしも思い出すことがありまして。

名古屋では、私は名古屋のモスクにいるんですけども、そういった女性の集まりでは 28 年前から、最初私の自宅で行っていて、そのあとはモスクが 1998 年にできてからモスクに移動しましたが、女性のお茶会というのを開いています。いわゆるサード・スペースにあたると思うんですけども、B 先生がおっしゃっていた、細谷先生がおっしゃっていた個々の葛藤に寄り添うミクロの活動というのが、それは本当にもうムスリム・コミュニティの中で、無資格のムスリムが対応していくしかないという現状がありまして。それが名古屋では 28 年前から最初は自宅で、そのあとはモスクという空間で、そのあとモスクの隣に立ったビルの中、モスクではない場所で、もうちょっと気軽に来やすい場所ということで、私ずっと勉強会ではなくお茶会という名前で、そこでお互いに経験がある人たちがそれに寄り添うという形で相談に乗る、あるいはこれまでの経験からどういう判断が下されてきたと言う事例を紹介するというのが今現在行われています。

本当だったらムスリム・チャブレンというのがいるというのが一番望ましいと思うんですけども、B さんのおっしゃった宗教権威の源泉みたいなところを考えるとそれだけの知識を持った人が日本にはとても少ない状態で、「じゃあ誰ができるの」となると本当に限られた地域で限られたモスクとか場所ではできないと思うんですね。おそらく C 先生がいらっしゃるような日本ムスリム協会のようなところに一時的にアクセスできる人は問題ないでしょうけれども、ほとんどの方がそうではない。

もちろんインターネットでも検索できますが、そういった大きな問題ではなく、細谷先生がおっしゃるミクロのそういった問題が起きた時にはじゃあどうしたらいいのかといったときには、結局チャブレンがいらない中ではどうしたらいいか私たちは既に名古屋では 28 年間自分たちでやり続けるしかない状態ですね。ようやく最近若い二世世代のムスリムの子供たちがアズハルにも留学し始めましたし、マディーナ大学は細谷先生サウジアラビアです、サウジアラビアに留学したりという形で少しずつイスラーム学を修める子供たちも出てきているので、これから 10 年後とか 20 年後にはできるのかもしれませんが、今



現在はどうにもならないという、人材がいない状態です。

イギリスでは 1990 年代にムスリム・コミュニティが成熟したという風にお二人の先生がおっしゃっていましたが、日本とイギリスはだいたい移民の歴史に 40 年ぐらいのギャップがありますので、それ考えると日本は 2030 年まで待たないとコミュニティが成熟しないというところもあって。もっとイギリスより悪いのはイギリスでは半数以上のイスラーム学者が国外から来ているというご発表がありましたけれども、国外から来ている方たちはおそらくイギリスでしたら英語が国際語なのでお出来になるかと思いますが、半数以上が海外から来たイスラーム学者が、日本で何ができるかという非常に難しい問題があると思います。日本の状況が分かっていない学者さんこれまでにいろいろいらっしゃいましたが、日本の状況が分からない中で例えばお醤油がハラールかどうかとか、ご両親との関係とか、日本人の女性が改宗したその後両親がムスリムではないけれども、この人たちは地獄に行くのか、そういう相談に対して、外国の方の感覚でお答えされて非常に傷ついたり悩んだりすごく苦しむ日本の女性がとても多かったというのがこの 28 年のお茶会の中で経験していることです。

ですから日本語を母語とするこの第二世代がこれから 1600 時間を修められるかどうかはわかりませんが、けれどもこの辺のハードルが低くなってきて、それこそ上智大学でそういったコースができるのかということであれば、上智大学を目指す日本のムスリム第二世代というのは間違いなく出てくると思うので、何か日本に合った形、イギリスはイギリスとしてまたあるんでしょうけれども、日本に合った形でのチャプレンシーの養成というのが本当は急がれるのではないかなと思いました。すみませんとりとめもないことですけれどもムスリムの女性としての意見をお話ししました。

**葛西：**ありがとうございます。成熟の条件というのを具体的に上げてくださって、我々のやらなければならないことと言うのが、目の前に掲げられたような気も致しました。ちなみに上智大学もそういうコースを作ろうと思っておりますので、そこにムスリムの方も入れるようにという願いもありまして、私ムスリムのことに関わらせていただいております。頑張ります。

**E 氏：**是非その際には名古屋モスクの方にもお知らせ頂けるとたくさんの第二世代がおりますので、また声掛けをさせていただきますのでよろしくお願いいたします。

**細谷：**細谷ですけど、先ほど C さんからチャプレンシーの資格の認定書を出している教育機関という話がありましたが、イギリスでは、マークフィールド・インスティテュート<sup>7</sup>ですよね、あとアメリカでは、ビラール先生もいらしたハートフォード<sup>8</sup>この二つがまずは確認できるかなと思います。

**C 氏：**ありがとうございました。

**細谷：**それから 99 の美名に関してですが、この本の中でガザーリーだと書いていたのでそのように書きました。それからコーランに関しては、私今朝一生懸命直したんですね。今日はイスラーム教のことをあんま

---

<sup>7</sup> <https://www.mihe.ac.uk/>

<sup>8</sup> <https://www.hartfordinternational.edu/>

りご存じない方もいらっしゃるということで最初コーランと記載していたのを今朝ちょっと直したんですけれども、直りきらなかったところがあって申し訳なかったです。

なんでコーランと書くかという、私は医科大学にいて医療者相手にイスラームの話をするのが時々あって、そこでやっぱりクルアーンという言葉を使うとそこからちょっと引かれてしまうところがあって、言葉遣いを医療者側とこちら側とすごく変えないと話が通じないということをよく経験していて、ちょっとその残像が残ってしまった。あと、そうですね、マディーナ大学をどちらか悩んで、昨日書いてみて、教えていただきありがとうございました。

**D 氏：**すみません、マディーナ大学ですけども、たぶんサウジにあるマディーナという場所のイスラーム大学のことなのか、もし「マディーナ大学」だったらサウジではないかもしれないですね。

**細谷：**本の中では、「マディーナ大学」という風にあったと思うので、それでちょっと悩んだんですけども。

**D 氏：**サウジにあるのはマディーナという街にある、大学という。

**細谷：**はい、「イスラーム大学」ですよ。ちょっとはっきりしないところが微妙にありました。後でまた確認します<sup>9</sup>。そうなんです、それで医療者側とのやり取りの中ですごく難しいなという風に感じているところがあって、日本人に関してムスリムというと外国人診療の一つみたいな感じになるので、とりあえず医療者たちの知りたいことがあって、そこまでがはっきりすればいいというところがあるので、例えば何がハラルとかかそういう話題の一步先にもう少し視線を向けてもらえるように医療者側にも理解してもらえるように努力したいなと考えているところで、また何か C 先生にもお手伝いいただくことがあるかもしれません。

**C 氏：**これは率直に申し上げまして、先ほど申し上げた色々の問い合わせとかが普通にメールで結構たくさん来るんですね。来ると問題性によって教務委員会とか布教委員会とか割り振りがありまして、答えなければいけない。答えるにあたってネットでファトワを細かく調べます。それだけで満足いく場合とない場合、まあ色々あるんですけども結局ソースは現状としてそういうことになることが多いです。ただ大半のものは、普通の意味の広い意味の常識でお答えできることも多いかと思います。また先ほどの名古屋の方の、だとか全国にもそういう有力な方々がおられますのでそういったところとも連携してできるだけいい答え、ケアができるようにということは考えています。ありがたいです。

**細谷：**ありがとうございます。

---

<sup>9</sup> 書籍内には University of Madinah とある。“Islamic”が入っていないが、文脈からしてサウジアラビアにあるマディーナ・イスラーム大学 Islamic University of Madinah を指すと考え。マディーナ・イスラーム大学はエジプトにあるアズハル大学と並び、イスラーム学者養成機関として名高く、世界中から留学生を受け入れている。

それからちょっと一つ。イギリスやアメリカや日本だと、ムスリムがマイノリティの社会でムスリムの信仰の権利をどう確保してゆくかという話なんですね。そこでチャブレンも、イマームでもないし一般人でもないチャブレンが相談に乗るという必要性が、先ほど E さんが日本の状況が分からないで傷ついてしまうということを教えてくださいましたけど、そういうことに対応してゆくのはすごく必要なのかなと思ったんです。ただ、イランで調査していて、イランでも、イランではマジョリティがムスリムなんですけれども、そこでもやっぱりその間の、チャブレンに近いような立場で相談に乗るという人の必要性が出てきているという状況があって、やはりこれは何か大きな流れの一つなのかなという風に感じているところでもあります。

それは具体的には、病院で相談に乗っている宗教の専門家が、こういうターバンをかぶったロウハニーと呼ばれるイスラーム法学者の先生もいれば、法衣を着ていないけれども、イスラームの専門的な教育を受けた人もいて、両者が少し相談内容を変えて対応しているようなことが私のフィールドでは見られていました。それはやはり患者さんの「がんになったのは私が今まで悪いことをしていたからでしょうか」、「礼拝しなかったからでしょうか」というような問いに、「そうですね、(イスラーム法学的に見ると禁止行為をし、義務行為をしなかった) あなたは地獄に行きます」と答えたりしてしまって、患者さんを傷つけないように、もうすこし配慮のある相談ができるようなトレーニングを受けた人たちが相談に乗るというようなそんな必要性が出てきているというところも見えています。

**C氏:** いまのような日常生活の中での必要性・重要性というのは古来ずっと継続的にある話なわけですね。問題性というか問題の内容は現代社会の問題ということが当然多くて、それは昔と異なるでしょうから、昔はウラマーというとはっきりした定義はないと言えないんですけれども、法学者と訳されたりしますね。各村々にはムフティと呼ばれるような名士というか、相談役みたいな人たちも当然いたわけですね。そういった人たちが身近な相談相手としての機能を果たしてきたということにもなります。

ただいざこれほど大雑把な話では進まないことではありますが、日常の細かな必要性に対応してゆくという必要性をどうやって満たしてきたのかというのは、これはチャブレンシーに始まったことではないというのは私の率直な感じ、つまりそうでなければ宗教は持たないと思いますからね。今後も当然それは求められていくと思いますので。ただ、英米における新しい事態というのは、新しい世代というか、構成が違いますよね、移民であるとか第二世代であるとか、それからロンドン市長自身がムスリムでしょう。そうですね。相当時代背景が異なっているという意味では、チャブレンシーは新しい課題・問題であろうかと思います。

**細谷:** ありがとうございます。

**葛西:** 6時半ぐらいにまとめるということで6時半になってしまったんですけれども、皆様の方はお伝え残しやちょっと言わせてほしいとか、よろしいでしょうか。今回 IG 科研という場をお借りして、このように、始めて間もない研究についてご相談ができた<sup>10</sup>こと、大変私は光栄に思っております。細谷先生も一言おっ

---

<sup>10</sup> 複数の専門家から重みあるコメントや助言を頂戴できたことに、報告者両名は、あらためて感謝申し上げます。

しゃって締めさせていただければと思いますがいかがでしょう。

**細谷：**そうですね、お正月明け第一弾で、お越しくださいますしてどうもありがとうございました。この本に出会い、ムスリム・チャプレンシーというような名前でおこなわれている活動について少し考えたいなと思ったのはもう何年も前なんですけれども、そのあと、Eさんとお話をさせていただき、他の先生方とお話をさせていただく中で、やっと今日この会が持てたという経緯があります。この後も色々と企画を考えたいと思いますので、是非参加していただければと思います。よろしくお願いします。

**葛西：**では皆さん良い年にしましょう、今年は。是非対面でお目にかかってご教示もいただきたいと思います。本当にありがとうございました。